

特集・1 中国・路線闘争の行方 ①

# 天安門政変と「走資派」

中嶋 嶺雄

## 1 天安門事件の残像

北京の天安門には、中華人民共和国の國章とともに、毛沢東主席の巨大な肖像が掲げられている。その天然色の肖像は、威容を誇る朱塗りの天安門城壁の中央に位置して動ぜず、あたりの景観とも調和して中国の絶対的指導者の重々しい権威をいやがうえにも感じさせる。その天安門の向こう正面、広場の中央には巨大な台座のうえに花崗岩でできた白色の方形の塔がある。表面には毛沢東の文字で「人民英雄永垂不朽」と書かれ、背面には亡き周恩来首相の文字でアヘン戦争以来の烈士に捧げる言葉が刻まれている。人民英雄記念碑である。

去る4月4日の清明節に向けて北京の百万大衆はこの人民英雄記念碑を周恩来を悼む献花で埋めつくし、さらに記念碑の先端高くに周恩来の遺影を掲げて広場をへだてた天安門の毛沢東の写真と対面させたのであった。その瞬間、群衆のあいだからは、歓声とインター（国際労働歌）の合唱がわきおこっ

たという。文化大革命以来、「東方紅」をはじめとする毛沢東讃歌を唱和することは馴らされてきた中国の民衆は、かくして久々にインターを天安門前広場で高唱したのであった。

こうした状況のなかで、4月5日朝、献花が一斉に撤去されたことを知った北京の大衆は一挙に騒乱をエスカレートさせ、すでに詳しく報ぜられたような大衆反乱となって爆発したのである。だが、そこに集まった数万人の群衆は、たんなる付和雷動や群衆心理からではなく、明白な認識に基づいていた自覚的かつ主体的な参加者であったのである。「われ悲しむに 鬼どもは叫び われ泣くに けだものどもは笑う ……中国は過ぎし中国にあらず 人民も思かさきわまれるものにあらず 秦始皇の封建社会は再びかえらず われらはマルクス・レーニン主義を信奉す マルクス・レーニン主義を去勢する秀才どもよ 引きさがれよ ……」といった詩や「紅心は既に勝利の果実を結び、碧血は再び革命の花を開かんとす ……」といった七言絶句が達筆で書かれ、周恩来讃歌のスローガンが林立する一方、江青夫人と姚

文元・党中央政治局委員への批判が「江流」とか「姚魔」などの言葉で氾濫するなど、いわゆる文革派指導者への明白な批判が提起されたことに示されるように、今回の騒乱は、たんなる偶然や自然発生ではあり得なかった。まさに香港の中立右派系紙「明報」社説が指摘していたように、「政治経験の豊富な北京の大衆がこのような事態を引き起こせば、その結果として各人がどのような立場に追い込まれるかということをよくわかまえているにもかかわらず」（「明報」76年4月6日）、今回の騒乱は爆発したのであった。

ここに今回の衝撃的な事件の奥深い意味が存することはいうまでもないが、この点については、中国共産党中央自身が、その深刻な意味を認めて次のように述べている。

「第一にそれは首都で起きた。第二にそれは天安門で起きた。第三に、 ……なんとすさまじい反革命の氣勢ではないか」（「人民日報」社説「偉大な勝利」、「人民日報」4月10日）

右の「人民日報」社説によれば、広場の大衆は「自

動車に放火し、建物に放火し、労働者民兵を殴打し、人民警察を殴打し、人民解放軍を殴打し、革命的大衆を殴打した」というのであり、彼らは、「手段をえらばず、謀略的、計画的、組織的に事をすすめ、政治的なデマをとばし、反動的な演説をおこない、反動的な詩を貼りだし、反動的なビラをまき、反革命組織を結成せよと扇動し、大衆をまどわし、事件を引き起こした」というのである。

このような事態が今日の中国のような国家・社会体制のもとで現実には発生したのであり、とくに首都北京は日頃から公安警察、首都民兵、北京衛戍区部隊の三者によって厳しく統制され、これらの官憲はそれぞれ華国鋒、江青、王洪文、汪東興らの文革派指導者によって掌握されているはずであるのに、右のような大規模な騒乱が起ったのであった。

それだけにこの未曾有の事態にたいして党中央は急遽、強権的かつ条件反射的に対応して事件二日後の4月7日、中央委員会の決議として鄧小平副首相の全公職からの解任(党籍は保留)と華国鋒首相代行の党第一副主席就任および首相昇格が打ち出されたのであった。こうした決定(4月7日付「華国鋒同志の中国共産党中央委員会第一副主席、國務院総理任命についての中国共産党中央委員会の決議」および同「鄧小平の党内外のすべての職務を解任する

ことについての中国共産党中央委員会の決議)はいずれも、「偉大な指導者毛主席の提案に基づき」という「お墨付き」を得たものであるとはいえ、現行憲法ならびに党規約上の所定の手続きを完全に無視しておこなわれたものであった。「党第一副主席」というようなポストを明示したのも前例のないことであり、これまでににも実際の政治的序列としてはそれが存在したとはいえ、しかし「第一副主席」というポストは現行党規約にも記されていないものである。こうした異例の措置を急遽とらざるを得なかったほどに、今回の事態が党中央、つまり文革派のリーダーたちに与えた衝撃と動揺は大きかったといわねばならない。

しかも、天安門事件の潜在的基盤は、端的に北京のみならず、広く中国全土にわたっていたようにも思われる。現に河南省の鄭州市でも清明節に北京と同様の事件が発生し、そこでは死者も出たことが確認された。また昆明発のロイター電(4月21日)は、「中国・雲南省で政治不安が暴動にまで発展、この二週間に三度も衝突事件があり、死者一人が出ている」ということも伝えている。上海、南京、杭州、無錫、廣州、武漢などの都市でも情勢は不穏であったとの情報もある。

一方、鄧小平は、ついに「悔い改めない走資派」

としての自己を貫徹した。こうして、鄧小平は、そのしぶとい個性と政治生命力を最後まで印象づけたのであり、事件直前におこなわれた清華大学の糾弾集会では、「ワシは老人で耳が悪い。君たちがいつていることはとんとわからないよ」と最後まで批判をはねつけたとも報ぜられた(4月13日北京発共同電)。結局、鄧小平はかつて国際的な非スターリン化の潮流のもと、56年の中国共産党八大大会で毛沢東主席を眼のまえにして、個人崇拜の弊害を説いて以来まさしく二〇年間、その前半の一〇年間は文化大革命へと収斂し、後半の一〇年間は今回の事態へと収斂することによって、一貫して毛沢東政治にたいする批判者だったのである。それはどの一貫性において鄧小平がまさに「反面教師」の役割を担って中国民衆に教えたものこそ、「貧困のユートピア」を求める毛沢東政治にかわって「豊かさの現実」への目覚めが必要であること、家父長的政治にかわって政治の公共化が必要であること、「毛沢東思想」に自己陶醉する中国にかわって合理的な政治と経済のシステムを備えた中国への道を開くべきこと等々であったような気がする。

鄧小平は、今回の事件によって政治的にはついに再失脚をよぎなくされたが、最後まで自己の主張を貫くことによって、歴史的・社会的には、まさに来

4月4日の清明節を契機に起こった天安門事件は、単に周恩来首相を弔う大衆の感情が爆発したものではなかった。

中国人民自身が今回の事件の意味を深く自問しており、そこに沈黙する民衆の意識こそ中国の将来を動かしてゆくにちがいない。今回の事件の深刻な意味の第一は、事件の底流に毛沢東政治への批判が含蓄されていたことである。

そして、そのような毛沢東政治の陰にある人物として、江青女史の役割が注目されている。

さらに筆者は、「走資派」の基盤はなお強固であり、文革派の暫定的な勝利にもかかわらず、決着はついていないとみる。

らんとする毛沢東以後の時代への捨て石にみずからなるうとしたのかも知れない。

ちがいない。

## 2 事件の深刻な意味

事件後一カ月たった現在、党中央は相次ぐキャンペーンによって「反革命分子の総代表」としての鄧小平の罪状を激しく暴露し、「走資派」の策動を系統的に暴露する姿勢を強めている（「人民日報」社説「天安門広場事件はなにを物語っているか?」、「人民日報」4月18日、梁劭「革命世論で反革命世論を粉碎しよう」、「紅旗」第五号など）。このような党中央のキャンペーンを支持する動きが、先の決議の発表以来、全国各地、各部門で展開されているけれども、やはりその官製のな色彩はぬぐいがたい。一方、「鄧小平問題の性格がすでに敵対性の矛盾に転化した」（前掲、中央委員会決議といわれながら鄧小平の党籍が保留され、「闘争のホコ先を党内の例の悔い改めよう」としない走資派にビタリとあわせなければならぬ）（「人民日報」社説「闘争の大方向をしっかりとつかもう」、「人民日報」4月6日）として批判の焦点を鄧小平にしほり、他方では李先念、葉劍英らの実務派幹部や譚震林、王恩茂、粟裕らの旧幹部が再登場するなど、明らかに事態の急激な收拾の過程で政治的妥協があったであろうことをうかがわせる反面、すでに見たように「走資派」を系統的に批判しようとする兆候もまたうかがえるなど、事態はまだまだ流動的である。

そうしたなかで、ともかくも一連の政治の嵐がすぎ去った現在、おそらく中国民衆の多くは、官製のなデモや集会の外にあって、文化大革命以来をとってみても、再三再四にわたる政治の激動の果てについて起こった今回の事件の重大な意味を、深く自問しているのではなからうか。そこに重く沈澱する民衆の意識こそ、やがて中国の将来を動かしてゆくに

党中央は、今回の事件をきわめて悪質な反革命事件としてとらえ、「一握りの階級敵が……事前に謀議し、計画的、組織的に反革命活動をおこなった」（「人民日報」労働兵通信員と同紙記者の共同執筆記事、「人民日報」4月8日）と断じたのであるが、しかし、「一握りの階級敵」が数十万から百万有余の動員力を現体制下の首都北京においても、その基盤が中国全土に潜在していると思われることこそ、きわめて衝撃的な事実であった。

そして、その深刻な意味の第一は、今回の事件の底流に毛沢東政治への批判が含蓄されていたことである。もとより、今日の中国において、毛沢東主席個人への批判が顕在化することはあり得ないであろう。だが、亡き周恩来をあのように礼讃することにおいて、毛沢東によって再び指弾されはじめていた鄧小平の立場を間接的に擁護し、同時に江青夫人や姚文元ら文革派リーダーへの激しい批判がこともあろうに天安門前広場で激発したという事実は、毛沢東政治ひいては毛沢東体制への内部的な抵抗であり、反逆であったといわざるを得ないのである。

第二は、そのような批判の反面、いわゆる周恩来路線への大衆の賛意が明白に表明されたことのもつ重要な意味である。「走資派批判が周恩来批判をも含蓄することへの大衆の懷疑、周恩来の死を哀悼しようとする大衆の感情の露を閉ざそうとした文革派への反撥が、一挙に周恩来礼讃となって爆発したのだとしても、党の一元的指導のもとで毛沢東主席のみを唯一絶対の偉大な指導者となし、いかに世紀

の宰相といえども毛沢東との並列は許されないはずの今日の毛沢東体制下において、このようなかたちで周恩来への高い評価が表面化したことは、それが毛沢東体制の末期に生じただけに、中国の将来にたいしてきわめて大きな意味を附与したのである。

第三には、そのような毛沢東政治を文化大革命以来、陰に陽に操作しつつ、「階級闘争」の名のもとに有力指導者の相次ぐ失脚をもたらした、「政治の恣意的な展開」をほしのままにしてきた張本人として大衆が考えた人物・江青夫人への批判がとくに激しく起こったことである。つまり、毛沢東家長体制のカメラを握る江青夫人こそ、政治を「私物化」しているのではないかと大衆は考えたように思われる。想えば、今日の中国の政治過程における江青夫人の役割については「批林批孔」運動の過程でも則天武后や呂后の例を引いて暗にそれを批判する論調が、他方での江青夫人擁護の論調と交互して存在してきたが、「周総理が江の水に流されるのは許さない」とのスローガンや30年に国民党に虐殺されたといわれる楊開慧女史（毛沢東主席の前々夫人で湖南の第一師範学校当時の毛沢東の恩師・楊昌濟の長女）への敬意が表されたことなど、今回は明らかに江青批判が突出したのである。このような政治の「私物化」にかんする江青夫人の役割は、つねに国家的使命観に立脚して公のための政治に粉骨砕身しつつ国家に殉じた観のある周恩来首相の役割との対比において、より鮮やかにならざるを得なかったであろう。そして楊開慧の名前が公衆の面前に出たことによつて、毛沢東主席の女性関係や私生活にかんする情報が公的メディアにおいては一切タブーであった中国においても、その密教的世界においては大衆周知の事柄であることがからずも露呈し、同時に、この点で

は現存する毛沢東の前夫人・賀子貞の名前でなく、革命烈士・楊開慧の名前を出すという「大衆の英知」が暗示されてもいた。最近の「紅旗」第五号論文(池恒署名論文「プロレタリア独裁の偉大な勝利」)は、プロレタリア独裁強化の一環として、「政治テマヤロコミのニュースにたいしては、信じたり広めたりしないばかりでなく、反論し、その源を突きとめ、ブルジョア階級にたいする意識面での独裁を強めなければならぬ」と述べているが、反面、今回の一連の事態のなかには、逆に中国民衆の意外に健全な政治意識が躍動していたといえなくもない。

同時に、多くの知識人が事件の背景に存在したであろうことについては、痛烈な比喩を含んだ各種の形式の詩が競われた観さであったこと、党中央が「反動的文人」の参加を挙げて糾弾していることによっても明白であった。

### 3 路線闘争の経過

中国における路線闘争がいかに曲折にみちたものであるかは、いままら指摘するまでもないであろう。そして今日の中国でしきりに強調される「階級闘争」とは、とりもなおさず「党内闘争」ないしは「路線闘争」のことであって、本来の社会科学の意味におけるブルジョア階級とプロレタリア階級との階級闘争ではあり得ないことも、いままら指摘するまでもない。「文化大革命」とはなにをやるものか。階級闘争ではないか、劉少奇は階級闘争消滅論をとなえたが、彼自身は消滅どころかその一群の裏切り者、徒党をかばおうとした。林彪はプロレタリア階級を打倒しようとし、クーデターをやろうとした。階級闘争は消滅したといえるだろうか(前掲「人民

日報」社説「闘争の大方向をしっかりとつかもう」という毛沢東の最新指示自身が、中国における「階級闘争」の本質的な意味を物語っている。

このような状況において、「階級闘争」の名における路線闘争、党内闘争が継続し、とくに73年夏の中国共産党十大会以来の「反潮流」運動は、脱文革の「潮流」への「反潮流」運動としてやがて「批修整風」運動から「批林批孔」運動へ、そして昨夏以来は「水滸伝」批判へと連続したのであったが、これら一連のキャンペーンの底流には、やはり周恩来批判が含意されていたことも今回、もはや疑問の余地なきほどに明らかになった。もともと、天安門事件以後、周恩来支持の大衆的基盤を考慮せざるを得ない立場に立たされた文革派としては、「学習と批判」誌第四号の労働者理論骨幹学習班集団討論執筆論文「工業発展を早めるうえでの若干の問題について」拔萃批判」が示すように、「走資派」の立場を周恩来路線と分離させ、「走資派」はいわゆる「四つの現代化」論においても、第四期全国人民代表大会での周恩来報告における「四つの現代化」論を歪曲したとして、周恩来批判の矛先を和らげ、もっぱら鄧小平批判に焦点を集中しはじめているが、やはり、底流に周恩来路線への批判があったことはすでに否定したいところである。

こうした状況が今回の一連の事態を通して明らかになったように、これまで不透明であった路線闘争の最近の局面がかなり明白になったことも事実である。

「人民日報」社説「偉大な勝利」は、73年4月の鄧小平復活と鄧小平の反逆のいきさつに触れ、大衆に批判されて、彼は悔い改めたいとし、「永遠に巻き返しをやらない」と誓った。毛主席は彼を救い、再び

仕事につく機会を与えた。ところが、彼は毛主席の彼にたいする教育と力添えをないがしろにし、権力の一部を手中にすると持病を再発させ、文化大革命が下した結論をくつがえし、文化大革命のカタをつけようとして、「三つの指示をカナメとする」という修正主義の綱領をかきつぎだし、ひきつづき反革命の修正主義路線をおしすすめて、先に立って右からの巻き返しの風をあおりたてた」と述べている。

この指摘自身、さきの鄧小平の復活は、「病を直して人を救う」という毛沢東の方針に従ったものであるどころか、林彪異変以降の中国内政面での空隙を背景として、まさに文革と脱文革の路線闘争の過程において路線闘争の一環として実現したものであることを物語っている。

こうした経緯のうちに復権した鄧小平は、昨年1月の第四期全国人民代表大会以降、党・政・軍の三権を掌中に収めつつあったのであるが、最近の「走資派」批判の諸論調がしばしば言及しているところによると、「右からの巻き返しは昨年の夏に起こった」(「人民日報」評論員「プロレタリア文化大革命の継続と深化」、「人民日報」2月6日、延風「唯生産力論のいわゆる新しい論点を評す」、「学習と批判」第二号、など)のであり、「まず昨年7、8、9の三カ月に、彼らは政治的なデマを飛ばし、大量の反革命世論を形成した」(「人民日報」社説「天安門広場事件はなにを物語っているか?」、「人民日報」4月18日)といわれている。この点は、鄧小平の「走資派」としての罪状の多くが昨夏以降の彼の言動に關するものであることによっても裏付けられようが、だとすれば、昨年夏の中国にはどのような事態が進行していたのかを回顧しないわけにはゆかない。

先の「学習と批判」第四号は、鄧小平らが昨年作成したといわれる「全党、全国の各分野における活動の総綱を論ず」、「科学院活動のメモ要綱」、「工業発展を早めるうえでの若干の問題について」（二十条）などに言及しており、これらの文書が昨夏以降流布されたことを暗示しているが、われわれが外部世界で看取し得た事実としては、まず第一に、昨夏の建軍節（8月1日）前後に、一連の旧幹部が大量復活したことであり、とくに羅瑞卿（元人民解放軍総参謀長）の復活は象徴的な出来事であった。文化大革命で激しく批判されて失墜していったこれら旧幹部の復活こそ、「右からの巻き返し」の明白なあらわれであったにちがいない。

第二に注目すべき事実は、昨夏の7-8月をピークとする杭州事件である。杭州事件は、工場労働者の賃上げ要求に端を差したストライキ事件であったが（この事件の性格についてはさしあたり、拙稿「杭州事件から『水滸伝』批判へ」、「アジア時報」76年1月号、参照）、事件の性格上、「走資派」の立場と杭州事件との相関性は否めないように思われる。そして第三には、「水滸伝」批判との関連であり、このような「右からの巻き返し」にたいして「対内的な階級的投降主義、対外的な民族的投降主義」への批判として起こった8月下旬以来の「水滸伝」批判、とくに「現代の宋江」への批判が展開されたのであった。

やがて「毛主席は高遠な識見から、鄧小平の巻き返しの活動を看破し、昨年10月から一連の重要な指示を差し、右からの巻き返しに反撃する偉大な闘争を展開するよう全党、全軍、全国人民を指導した」（前掲、「人民日報」社説「偉大な勝利」ののだという。まさにこの10月は、「農業は大躍に学ぶ」全国会議が

当初の大躍から北京に移されて閉幕した時期であったが、華国鋒の基調報告で注目された大躍農業会議では江青夫人とともに鄧小平も演説をおこない、鄧小平は「三項目指示」をこの会議で唱えて譲りなかつたものと思われ、当時は、「人民日報」も「三項目指示」の立場に立っていたのであった。そうした経緯のうちに清華大学を舞台とする教育革命論争が昨秋開幕し、「走資派」批判へのプロローグとなった。

だが、12月初旬のフォード米大統領訪中時には、鄧小平副首相が全幅の活躍を示して周恩来首相の代行をつとめたことに示されるように、鄧小平の活躍は依然として目立っていた。想えば、本年元旦に毛沢東主席の新しい二つの詞が紹介され、それは「走資派」打倒への含意をもつものであったが、たまたま訪中したアイゼンハワー元米大統領の子息デービット・アイゼンハワー氏が伝えたように（「ウォール・ストリート・ジャーナル」2月20日）、鄧小平だけがこの詩を唱和しなかったのは故なしとしないのかもしれない。

その直後の1月8日、周恩来総理は逝った。そして1月15日の周恩来追悼式（葬儀）には鄧小平が全参加者を代表して弔辞を読み、筆頭副首相としての地位を示した。党内序列としては第二位の王洪文ではなく、鄧小平が弔辞を読んだこと自体、冠婚葬祭に敏感な中国人の意識構造においてきわめて刺戟的な事実であったように思われるが、その鄧小平の弔辞は前半において中国革命における周恩来の事跡を詳細にたどりつつも、後半の建国後の部分にかんしては文化大革命の個所などはとくに抽象的な表現で簡略に記述し、最後には「わが国を近代的な社会主義の強国に築きあげるため」に奮闘すべきことを強調して、まさに「悔い改めない走資派」の立場から

周恩来の生涯を総括し、同時に周恩来路線の継承を固く誓ったに等しいものであった。この事実は、誰もが来るべき毛沢東の死を想起せざるを得ない場面でも、文革派のリーダーたちを大いに刺戟し、苛立たせたものと思われる。このとき以来、鄧小平は公衆の面前から姿を消したのであるが、同時に文革派は、鄧小平打倒への布陣を固めていった。

このようなとき、1月19日夜には、はやくも、全国各地から天安門前広場の人民英雄記念碑に捧げられた周恩来への献花が人民解放軍の手で撤去されるという事件が起き（天安門事件と同様のこの事件がすでに起きていたことの意味については拙稿「底流に毛沢東政治への批判——天安門事件の背景——」、「朝日ジャーナル」76年4月16日号、参照）、党中央は周恩来の死を悼む大衆の感情を明らかに抑えようとしていることを示していた。この前後の時期に党中央は周恩来の死を必要以上に悼むことを禁ずる通達を発したとの未確認情報もある。やがて、1月下旬から2月初旬のあいだに開かれたと思われる党中央の重要会議では鄧小平の首相昇格への抵抗が功を奏し、2月7日には華国鋒の首相代行就任が確認されたのである。「走資派」批判はその前日、「人民日報」評論員論文「プロレタリア文化大革命の継続と深化」によって、すでに本格的に開幕していたのであった。

だが、「走資派」批判は、主に大学のキャンパス、「人民日報」や「紅旗」などのマス・メディア、大衆生産大隊や大慶油田、軍では瀋陽部隊など文革派の拠点ないしはモデル地区において高揚したものの、全般的な盛り上がりは欠き、状況は膠着しつつあった。とくに3月中旬以降は、「走資派」の潜在的基盤の根強さと文革派への抵抗とが各地で伝えられ、た

とえば3月28日付「人民日報」社説「右からの巻き返しに反撃し、工業生産を促そう」は、「右からの巻き返しに反撃する闘争が生産に悪影響をおよぼすのではない」という考えかたが広く存在し、こうした考え方からする文革派への抵抗が根強いことを認めざるを得ず、「走資派」批判が、生産活動を阻害するものでないことをあえて強調しなければならなかった。

天安門事件は、こうした経緯のうちに生じたのである。従って、事件の真の組織者は誰かという巨大な謎は、このような経緯を分析したのちに、はじめ提起され得る問題だといえよう。

#### 4 「走資派」とはなにか

「走資派」とは、いうまでもなく、文化大革命への反対者を「資本主義の道歩む(走)実権派(当権派)」として断罪するためにつくられた用語である。私自身の体験に照らせば、かつて66年11月中旬、上海の外灘(旧バンド)で「鄧小平は党内の資本主義の道歩む第二の実権派である」と題する匿名様紙(一〇人連名のガリ版刷りの小字報を「発見」したとき以来の言葉でもある。このような用語が今回のキャンペーンでは「走資派」として集中的に用いられるようになったのであるが、毛沢東は、昨年10月以前の局面において、「社会主義革命をやっているのに、どこにブルジョア階級がいるか知らない。ほかでもなく、共産党の内部にいる。党内の資本主義の道歩む実権派がそれである。走資派はいまおその道歩んでいる」(前掲、「人民日報」社説「右からの巻き返しに反撃し、工業生産を促そう」と述べ、明らかに鄧小平個人を指して、「彼という人間

は、階級闘争をつかまず、これまでずっとこのカナムを口にしたことがない。やはり、例の『白猫、黒猫』の論調で、帝国主義であろうとマルクス主義であろうとかまわないのである」(同題と指摘したという。

このような「定義」に従えば、「走資派」とは、中国共産党内にあって「階級闘争」をつかまない分子ということになるであろう。だが、ここでいう「階級闘争」とは、とりもなおさず、路線闘争であり、党内闘争なのであるから、文革派への批判者の側からすれば、そのような「階級闘争」はそもそも掌握し得ないものであり、掌握するとすれば、みずからの首をしめることになる以外にないものである。ここに、今日の中国における「階級闘争」論の無理が存在するのであり、その非科学性を指摘せざるを得ないゆえんである。

では、「走資派」とは、文字通り、「資本主義の道歩む者 Capitalist Roaders」なのであろうか。鄧小平の経済主義にせよ生産力第一主義にせよ、それを文字通り資本主義への道と断ずることは論理的にも実態的にもやはり無理が多いところに、また「走資派」の潜在的基盤の根強さがあるのであり、逆に文革派の基盤の脆弱さがあるといえよう。

つまり、「走資派」という用語は、政治的反対者への非難のためのレッテルなのであって、それが「資本主義の復活」を意味するなどとは、もっとも単純なレトリックとしても妥当性に欠けることを中国民衆が熟知しているがゆえに、「走資派」批判のなかでの反批判が天安門事件となって顕在化したのであった。

私はかつて、文化大革命における「実権派」を定義して、「実権派(当権派)とは、こうした「毛沢東

思想」の絶対化過程における批判と抵抗の非連続な総体としての政治勢力にほかならない」と述べたことがある(拙著『現代中国論』増補版、71年、青木書店)。中国の公式紙誌がいうように「走資派」が「悔い改めない実権派」であり、「文化大革命のカタをつけよう(算帳)としており」さらに、「彼らには、理論があり、組織があり、綱領がある」のだとすれば、「走資派」はやはり「毛沢東体制への批判と抵抗の潜在的基盤の総体」だといわねばならず、その潜在的基盤が文化大革命を経て今日にいたってもなお強固であるところに、今日の毛沢東政治の重大な危機があるのだといえよう。そうであるだけに天安門事件は、毛沢東体制の深刻な亀裂と内部矛盾を一挙に露呈した事件であったといわざるを得ない。

しかも鄧小平個人がついに「悔い改めない実権派」として失墜していったことによって、なお鮮やかに浮かびあがったのが、「走資派」の路線自体であり、毛沢東政治ないしは文革路線との対照的なオルタナティブが中国民衆の面前にこれほどはつきりと提示されたことはかつてなかったといえよう。

その路線とは、いわゆる「階級闘争」の名のもとでの路線闘争、党内闘争を「永続革命」として不断に続ける文革路線にかわって、政治的な「安定・団結」を求め、「国民経済の向上」を目指すものであって、鄧小平は、毛沢東体制下におけるこのような選択を、「安定・団結」、「国民経済の向上」、「プロレタリア階級独裁理論による反修防修」という三つの毛沢東指示の並列によって遂げようとしたのであった。

そして、鄧小平の対外・対内認識は、革命官僚としての手堅いリアリズムに裏付けられて、当面の中国の国内建設にかんする多面的な政策展開となつて

## 鄧小平語録

資本主義の道を歩む党内の最大の実権派鄧小平は復活して地位に就くとく、党の基本路線をねじ曲げ、「三項目指示をカナメ」とする修正主義路線を唱えた。彼は文化大革命に対して根っからうらみを持ち、「三項目指示」をかかげて、この偉大な革命運動を否定しようとするたくり攻撃した。文化大革命が生んだ新しいさまざまな現象をののしって攻撃した。うえ、全国で繰り広げられている大衆的マルクス・レーニン主義、毛沢東思想学習運動や老、中、青三結合の指導機関のあり方、労働者階級が上部構造を占めてブルジョア階級に対して全面的独裁を実行すること、文芸革命、教育革命、衛生革命、科学技術革命などについてデマを飛ばし、侮った。鄧一味がこのように文革が生んだ新しい現象を起りになって攻撃したのは、文革の成果をひっくり返し、後戻りさせようとするたくりからである。彼らがどのように「新生事物」に反対したかをあげるが、われわれはそれに毛沢東思想をもって痛烈な批判を加えようではないか。(北京大学の壁新聞につけられた前置)

### 〈教育革命について〉

▽学生についていえば、学問を主とし、その他を従とすべきなのに、多くの者は片寄りすぎていてその他を学ぶのに多大な時間をかけすぎている。大学生らしい大学生は本当に少ない。

▽学校は学問を主としなければ、いったい何をやるのか。周崇鑫同志は教育相の地位にありながら、どうして一言もいわないのか。学校教育は学問を主とするの方針に基づき、今後の作業を進めてみてはどうか。

▽上海機械工作場のやり方は一つの方法であろうが、決して唯一のやり方とみなすことはできない。科学技術大学をうまく運営すれば、科学技術の基礎のある者を大学に送りこむことができる。

〈注〉上海機械工作場 毛主席は68年7月21日、「学生

は実践の経験を持つ労働者、農民の中から選ばなければならぬ」と述べた。上海機械工作場はこの指示に従って同年9月、初の工場付属の「7・21労働者大学」を発足させ、多くの技術者を養成、全国の模範となった。

▽現在の学校は、学問をやらぬことが毛沢東思想だとしている。

▽ちゃんとした後継者を育成するためには、なんといつても教育が大事である。大学では何を学習しているのか？

いまだに「学問を主とすること」に異論があるではないか。▽鋼鉄学院のように中等専門学校(日本の専修に相当)程度の水準しかなければ、大学ではなにをするのか。

〈注〉鋼鉄学院 北京にある機械系大学で、かつては清華大学の一部だった。

▽上海機械工作場の「7・21大学」は一つの形ではあるが、唯一の形式ではない。発展させていくべきだとは思いますが、「7・21大学」がこれまでの大学にとって代わることはできない。科学技術系大学を上手に運営して、数学、理科を学ぶのがよい。

### 〈プロレタリア独裁理論の学習について〉

▽プロ独裁理論を学習する目的は、セクト主義を克服するためだ。

▽現在、納めなければならないさまざまな「税金」が多すぎる。やり方がめちゃくちゃだ。ある機関は仕事が終わってからも、毛沢東選集の学習文献の学習をすることを定めており、赤ん坊がいる者でも帰宅してかまっていられない。そういうことをやってみても、あまり効果はない。「疲勞戰術」に出る者すらいる。「税金」過多は、社会的な問題になりつつある。

▽毛沢東選集をどのように学べば一番効果があるのか、研究してみようではないか。報告会を一度欠席するとすぐ積極的でないといまされる。一つの報告は、一度聞けば十分ではないか。なぜ、何回も何回も繰り返して聞かなければならないのか。形式主義が横行しているのしか言いがたない。

▽毛主席は経済学分野、とりわけ農業経済分野では

現実化しつつあったのである。先の「人民日報」社説「右からの巻き返しに反撃し、工業生産を促そう」によると、「独立自主、自力更生」に反対して「外国崇拜哲学、牛歩主義」を志向し、「中央と地方の二つの積極性発揮」に反対して「政府部門からのタテ割り命令行政」をもちだし、「二本の足で歩く」ことに反対して、「大規模なもの、近代的なもの」を強調し「鞍山鋼鉄会社の憲法」に反対して「マグニトゴルスキー鉄鋼コンビナートの憲法」を吹聴した、といわれている。

まさに、鄧小平のこのような政策こそ、周恩来が政治的遺言のように昨年の全国人民代表大会で強調した「国民経済体系の整備・再建」というヴィジョンの具体化であり、「工業、農業、国防、科学、技術の四つの現代化」を実現するための具体的な政策であったといえよう。

このような経済政策は、当然、中国の対外関係をより開かれた国際環境において展開してゆくことを必要とするであろう。こうした立場を、「紅旗」第四号の「海外署名論文「洋奴哲学を批判する」がいうように、「拜外主義」、「外国崇拜」として批判することは容易であろうが、しかし、では今日の中国にどのような代替策が可能であるのかを具体的に明示することはきわめて難しい。一方、「走資派」の立場からするならば、かつて55年7月、第一次五年計画期に「過渡期の総路線」として採択された長期的・漸進的社会主义建設という中国社会主义建設の合意されたヴィジョンを、それが全国人民代表大会で承認された翌日、毛沢東が「農業協同化の高まりについて」の報告によって大衆動員的に切り崩して以来、「大躍進」政策、文化大革命を経て今日にいたるまで、中国社会主义独自の試行錯誤というにはあまり

非常に豊富な思想を持っているが、それらは系統だつていない。

▽いわゆる「政治第一」とは、「毛沢東思想第一」ということである。「毛沢東思想第一」とはどういう意味なのだろうか。私はこの点がはっきりしない。

〈労働者階級の指導について〉

▽労働者 農民 兵士への依存は相対的なものである。(76年2月6日 第九回全国総工全準備委員会が暴議)

▽幹部や科学院は自分で問題を解決し、労働者宣伝隊を使うな。(75年9月26日)

▽北京大学があのお教授を採用しないなら、半導体研究所に転勤させ、その所長にしたらどうか。そして、彼に書記をつけ、後方勤務にさせたらよい。

〈知識分子に関する政策について〉

▽知識分子を改造しなければならぬが、ただ改造するだけではだめだ。彼らと団結し、かつ彼らを使っていかなければならぬ。

▽科学技術者の積極性を引き出すために、三結合を実行しよう。科学技術者に生氣を与えようではないか。知識分子をブルジョア・インテリなどと呼ぶな。毛主席すらブルジョア・インテリはただけだが、必要だと言っているではないか。(75年7月24日)

▽われわれの技術が遅れているので、われわれはいつも農業が工業の足を引っぱってきたとみていた。科学・技術の未発達は工業を遅らせているが、われわれがこれから登ろうとしている科学の高峰は、中峰なのかそれとも低峰なのか。

▽少数の科学・技術者はまるで罪を犯したかのようにひっそりと研究を続けている。

〈老、中、青の三結合について〉

▽いわゆる後継者の育成については、青年たちの党に対する忠誠心を高め、彼らの態度を改善し、人々と団結できるようにさせることが必要である。言いかえれば、とりもなおさず、このわれわれにもっと依存する必要がある。

▽この数年の経験から照らしてみれば、青年たちの昇格が早すぎる。「ロケット」式に躍進した幹部は、とくに思つたほどの効果をあげていない。やはり一段階ずつ昇格させ

る方がよいのではないか。石段と同じように一段一段あがっていくのがよいのであって、飛び越しはよくない。ポストがあがっても経験がない。ただ手をこまぬいている(青年)幹部をどうすればよいのか。解任できなければ、どこかに下放させればよい。

▽三結合によって引きあげられた青年幹部は元々経験がない。彼らを使いつせいに未端に下放させて改造し、きたえ直してはどうか。

▽老幹部を早く解放して重用し、老幹部に本領を発揮させる必要がある。あるところは、まだこの問題を解決できないでいる。老幹部を起用すれば、人々はきつと「婦郷団」が帰ってきた、復活したと言ひに遠くない。プロレタリアートの「婦郷団」が帰ってくれば、ブルジョアジーにも早く追いつけるし、プロレタリアートの眞の復活となる。

▽ヘリコプターでやってくるのもよくないし、ロケットでやってくる幹部もよくない。

▽指導機関は老幹部に依拠すべきである。

〈文芸革命について〉

▽われわれの修正主義は主要な地位を占めていない。党が文芸界を指導するのが正しい。

▽新しい演劇は良いところが少ない。今後、また古い演劇が出てくるだろう。演劇改革には私も両手をあげて賛成する。ただ、あまり見たり、聞いたりする気にはなれない。

▽帝王才子のふるまいを演じてみせることも必要なのではないか。

▽新劇運動に携わっている人たちの中には、文章を書こうとしない者がいる。新華社は、毎日、二つの原稿を掲載しているだけだ。演劇についても兵隊だけを描き、戦争ものだけを演じている。映画も悪玉、善玉だけを描写したのが多い。そんなものはくだらない。やらない方がよい。(64年1月3日)

▽芸術家については、彼らが国民党員でなければ、彼らと極力団結しようではないか。(75年9—10月)

▽現代の京劇では、切符も売らさばくことができない。京劇のセリフを見向きもしない人も出てくる。

▽面白くて、そう害のない映画は、上映してみてもどうか。

にもリスクが大きく、ロスも多い、恣意的な政治と経済の運営がなされてきたことを、広範な中国民衆とともに改めて自覚せざるを得ないからである。結局、「走資派」批判は、中国の国内建設過程にこれまで存在した「穏歩」と「急進」ないしは「紅」と「專」の対立の延長線上に位置づけられる路線闘争、党内闘争なのであって、そうであるかぎり、「走資派」の立場を「唯生産力論」、「利潤第一主義」、「近代化路線」、「業務台風」、「経済台風」、「洋奴哲学」などの言葉でいかに激しく断罪しようとも、問題の根は一掃されたことにならないであろう。

高度工業社会の文明の「成熟」に倦怠した饜雅で無責任な知識人が「失われた文明」への郷愁の対象として「毛沢東思想」に基づく中国社会の「先進性」を講壇的に説きまわるとき、題材としての中国ならばともかく、八億民衆の生活の基盤として、今日の活きた中国にとって、国内の工業化、農業の機械化を中心とする近代的な経済体系の整備、建設の方向は、昨夏の杭州事件にみられる労働者階級要求を見るまでもなく、いまや衣・食に満ち足りた中国(第四期全国人民代表大会での周恩来政治報告)において、もはや後戻りのできない社会的・国家的要諦であるように思われる。このような客観的现实を考えたとき、「走資派」は依然として敗北していないのだともいえる。毛沢東以後の時代へと時間ははいよいよ迫りつつあるのであり、今回の激動の結果としての文革派の暫定的な勝利にもかかわらず、勝敗は依然として決着し得ていないと見なければならぬ。今回の事態によって中国が毛沢東以後の時代への巨大な不安を残してしまったことだけは、もはや疑う余地のないところである。

(なかじま みねお 東京外語大助教授)



朝日アジアレビュー第七巻第二号昭和五十一年六月一日発行  
昭和五十年十一月十一日国鉄首都特別乗車証補正第二四七〇号

the asahi asia review 26:1976 summer  
通巻第二六号・一九七六年第一号

# 26 夏季号

第1 特集 中国・路線闘争の行方

第2 特集 アジアの歌謡



朝日

# アジアレビュー

## ★第1特集

中国・路線闘争の行方

●天安門政変と走資派

中嶋領雄

●華国録政権と二つの路線

本橋渥

●第五次五カ年計画と農業の大変革

吉田実

## ★第2特集

アジアの歌謡

●英雄叙事詩のイデオロギー・ヘモソル

田中克彦

●歌謡に生きる宗教と神話・ヘインド

草野妙子

●民族的感性の南進・ヘトナム

森幹男

●時により相手により・ヘビルマ

大野徹

●交錯する笑い・と涙・ヘ韓国

金尚基

日韓企業集団抱合の位相

知久功

「救国宣言」と韓国宗教者

倉塚平

タイにおける中央と地方の

政治的抗争の歴史

ミンジャ・ヤン